

“誠実”と“感謝”を胸に歩を進める。 思いがあれば成長につながる

元幕内力士「大道」こと、阿武松健二さん。

2016年に現役を退き、部屋付き年寄として後進を指導。19年9月、阿武松の名跡を継ぎ親方となった。

37歳という若さながら阿武松部屋を牽引する中、先代・阿武松師匠から受け継いだもの、

そして現場で育成する弟子たちへ伝えていくものについて、新年の目標とともに聞いた。

阿武松親方 元幕内大道関 阿武松健二さん (平17・経営)

おうのまつ けんじ●1982(昭和57)年生まれ。13代阿武松。本名・中西健二。元幕内力士大道関。東京都葛飾区出身。専修大学経営学部経営学科卒。大学4年次に東日本学生相撲選手権大会・体重別無差別級で優勝、卒業後プロ入りし、阿武松部屋に入門した。現役時代のしこ名「大道(だいでう)」は出身中学校の名前から。序二段優勝1回、序ノ口優勝1回の成績を残し、2016年33歳で引退後は年寄・小野川～音羽山となり後進を指導。19年、名跡・阿武松を襲名し阿武松部屋を継承。座右の銘は「千里の道も一歩から」。

新型コロナウイルスの感染症対策として、また九州場所前ということもあり取材はリモートにて行われた



現役時代、専修大学出身の幕内力士・「大道」として活躍し、大いに注目を集めた阿武松健二さん。定時総会や激励会など、校友会の集まりで言葉を交わし、その実直で真摯な人柄に触れ、ファンになった校友も多いだろう。現在は親方となり先代の名跡を継ぎ、弟子たちの師匠として阿武松部屋を率いおおよそ1年。どのような思いで臨んでいるのだろうか。

まだ30代の若き親方 自ら土俵に立ち指導する

「先代師匠(元関脇・益荒雄関、愛称は『白いウルフ』)の厳しく、愛情深い教えをしっかりと受け継ぎ、弟子達にも伝えていきたいと考えています。出身の阿武松部屋は角界でも稽古が厳しいことで有名ですが、そこは守っていきたいですね。ただ、厳しいところ

は厳しく、かつ、リラックスする時間も作っています」

稽古では自らまわしを締め、同部屋の幕内力士・阿武咲(おうのしょう)関にも胸を出すなど、いまなお現役さんながらの日々を送っているという親方。おかげで現役時代から15kg程度しか体重が落ちていないと笑う。

「言葉や力で押さえつけるような指導はしません。私の動きを見せることで直に理解を深めてほしい。親方が自ら胸を出す部屋は多くないですし、自分が若いうちしかできませんから、しっかりと伝えていきたいと思います」

弟子たちへの指導は技術だけに留まらない。特に重視しているのがモチベーションだ。阿武松親方は各自の個性を特に大切にしているという。

「褒めて伸びる子もいれば、厳しく指導することで伸びる子もいる。個人

差がありますから、本人に合った方法で教えるように心がけています。そのために、毎日のコミュニケーションをしっかりと取ることの重要性を改めて実感しました。現役を退き、部屋付きの年寄だった頃、私は近くに借りた自宅から部屋まで通っていたのですが、朝稽古に来て、昼ごはんを食べたら帰宅していた。しかし師匠となってこの部屋に家族で移り住み、部屋で暮らす弟子たちと24時間、日々の生活をともにすることで、それまで気づいていなかったそれぞれの性格が、細かいところまでよく見えるように。距離が縮まったと感じています」

このような親方と弟子との関係が四六時中続くことを息苦しいと感じる若い力士もいる。一方、阿武松部屋のブログを見ると、弟子たちがそれぞれに日常を楽しく過ごす様子が垣間見え



阿武松部屋の力士・床山一同

る。「ブログはおかみか書いています。後援会やご家族、応援してくださる方との交流などを紹介するとともに、取組や稽古中には見せない力士たちのプライベートな表情、にこやかな素の笑顔が好評です。私が親方になってから新たに始めたブログですが、だんだんみんなが個性を出しながらのびのびと写真に写るようになってきました。ぜひ一度ご覧になってください」

人並外れた体格を持ち 小学校から相撲の世界へ

身長187cm、現役時代の体重は172kgと見事な体格の持ち主である阿武松親方。小学3年生のとき、すでに160cm、70～80kg近くはあったという人並外れた体格から、相撲教室に通う上級生に入門を勧められる。それが相撲を始めたきっかけとなるのだが……。

「裸でまわしを締めるのが恥ずかしいんですね、小学生なので(笑)。だから最初はイヤで。運動神経も取り立てて良いわけではなかったのです。



現役時代は大道関として活躍。序二段優勝1回、序ノ口優勝1回の成績を残した写真提供：阿武松親方(上の写真とともに)

大道関を励ます会



同級生で第29代WBC世界バンタム級チャンピオン・山中慎介選手との貴重な2ショット。2人とも現役時代の「励ます会」にて

ただ、試しに取組を体験して勝ったとき、それまでにはない喜びがありました。それで続けてみよう。身体はどんどん大きくなり、小学校卒業の頃には177cmほどになっていたと思います」

以降、中学、高校と相撲を続けることになるが、プロになるつもりはまったくなかったという。相撲部屋には、とてつもなく厳しいイメージしか持てなかったからだ。

「同じ相撲道場の先輩が中学卒業後にプロへ行ったのですが、2年ほどで地元に戻ってきて、相当キツイという話を聞いて。だから自分には無理だろうと、漠然と思っていました。そんな自分が『相撲界に行ってみよう』と少なからず考え始めたのは、大学に入ってからです」

父も道場の師も専大出身 不思議な縁で結ばれる

実は、小・中学校で教わった相撲道場の先生は専修大学相撲部のOB、そして実の父親も専大出身と、入学前から専修大学との不思議な縁を感じていたという。

「父は相撲こそやっていませんでしたが、私が入学したときに、すごくう

れしようにしてくれて。専大進学後は親元を離れ、初めての寮生活。先輩は厳しいながらも、さまざまな経験をしました」

部員のバスタオルや衣類を洗い、寮内外の掃除など、それまで父や母にやってもらっていたことを自分達で回していく中で、改めて父母のありがたみを感じる。他に頼るところもなく、同級生たちと密に過ごしていくうちに、強い絆が結ばれていく。

「稽古はきつかったんですけど、オフタイムに結構息抜きができました。稽古は日曜以外の毎日夕方からでしたが、夜に同級生と街へ出たり、向ヶ丘遊園駅まで行って食事をしたり。行きつけの喫茶店はドライカレーが美味しくて、よく通っていたんですが、この間、久々に行ってみたらなくなっていてショックでした(笑)。3、4年生になると車が使えるので、たまにドライブがてら食事をしに東京へ出たり、みんなで行くのがとても楽しかったですね」

相撲部だけではなく、専大でたくさんの人との出会いにも恵まれたという。特に1年生時のクラスメートたちは、



写真提供：阿武松親方

試合で休んだときなどにノートを見せてくれたり、テストに出る範囲を教えてくださいと、とても親切だった。いまでも彼らとつながっており、時折会うこともある。

プロ入り後も人に支えられ 新たな夢へ歩みを進める

4年生の秋、東日本学生相撲選手権大会・体重別無差別級で初のタイトルを取り、優勝。その集大成として、プロを目指したいと思うようになる。

「それ以前から、先代の阿武松親方にずっと声をかけてもらっていたということもあります。とはいえ、まだ迷いがありました。相撲への自信を持って、プロへの気持ちはあるものの、やっていける自信がなかったのです」

どの道に進むか悩んでいたそんなときに、相撲部の監督がかけてくれた「お前なら大丈夫」の言葉が、気持ちを後押しする。

「監督には本当に感謝しています。キャプテンをやらせてもらい、チームをまとめる経験を通して責任感が芽生えました。同級生たちはもちろん、監

督はじめOBのみなさんもずっと気にかけてくださって、本当に専修大学に入ってよかったと思っています」

大学生活を終え、先代師匠に導かれて阿武松部屋に所属。いよいよ大相撲の世界へ進む。寮で集団生活を学んだことで、部屋にも違和感なく馴染むことができた。しかし、部屋歴の大卒力士のなかでもなかなか出世が叶わず、苦難の日々が続くことになる。どのように気持ちを維持していたのか。

「あと一歩で十両(関取)という直前にケガをして、気持ちが折れそうなきもありました。しかし、阿武松部屋には専大相撲部のOBが3人いて、本当に助けてもらいました。また毎年、校友会の集まりでも応援していただけて、ここでやめたら裏切ることになる、ここで終わったらダメだ! と前向きに乗り越えることができました。関取になるまで丸5年かかりましたが、あきらめずに進んでよかったと思います」

それまで相撲を教えてくれた先生方、監督、先輩、同級生、クラスメート、応援してくれる校友の方々に恩返しをしたいという気持ちが阿武松親方の支えとなった。

そんな現役時代、強く心に残っている勝負は、山本山関との一番。勝てば幕下から十両への昇進がかかっていた。

「先代師匠は普段、弟子が緊張するので、取組については何も言いません



部屋のブログ「おかみさん日記」より。自然な表情があふれる阿武松部屋の若手力士。普段のリラックスした様子が窺える



校友会・専修大学から2度贈られた化粧まわし。複数回の贈呈は稀で、期待のほどが現れている
撮影(右)=鶴田孝介

が、このときは前日に師匠から食事に呼ばれ、『今日だけは指導する。負けても俺の責任だから』、という言葉ももらいました。これで、すごく気持ちが軽くなったものです。当日、指導の通り、上手を取って、思い切り投げて、勝てました。一番嬉しかったですね。師匠には感謝しかありません。そのときは応援してくださっているみなさんの顔がぶわーっ、と浮かびました」

座右の銘である「千里の道も一歩から」さながら、一歩ずつ着実に歩みを進め、これまでの経験や学びが阿武松親方を形作っている。大学では会計学を学んだが、「まさか相撲部屋を持つことになるとは思わなかったが、実務と

して役立っています」と、はにかんだ。最後に、新たな年を迎え、これからの抱負について語っていただく。

「誠実さは大事にしていきたいと思っています。まっすぐやることをやれば、支えてくれる方もいる。道に迷うことがあれば、お世話になった方々の顔を思い出して、真摯な気持ちで乗り越えていきたいですね。親方としては、自分が育てた弟子たちも応援していただけたらと思います。部屋から大関、横綱を出すという夢がありますが、なおかつ、弟子たちの“人”として、社会人としての成長を、これからも後押ししながら支えていきます。そして、日本には相撲がないとダメなんだ、という気概を持ち、相撲の文化を守っていきたい。校友のみなさんにも相撲を通じて、少しでも前向きな気持ちになっていただければ幸いです。今後とも応援をよろしく願いいたします」

多くの人に支えられている親方の誠実さと感謝の思いが、恩返しの連鎖となり周囲に伝わっていく。

(2020年10月取材)

阿武松部屋

検索